

チャーリーとパパの飛行機

2007(平成19)年8月24日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督・脚本＝セドリック・カーン／原作＝マグダ、ドゥニ・ラビエール『CHARLY』（エディション・デュピュイ）／出演＝ロメオ・ボツァリス／イザベル・カレ／ヴァンサン・ランドン／ニコラ・ブリアンソン／アリシア・ジェマイ（ワイズポリシー配給／2005年フランス映画／100分）

……クリスマスのプレゼントとしてパパからもらった模型飛行機が、パパの遺品に……。チャーリーとママの「喪失感」は何によって癒されるの……。そして、家族の絆の再生は……。空を飛ぶ模型飛行機にどんな意思をもたせるのか、それが、子供も大人も納得できるファンタジー映画とするための条件。しかして、そこはフランス映画らしく、またセドリック・カーン監督らしいもの……。心温まる感動的な結末に向けての展開を、しっかりと実感してもらいたいものだ。



これはフランス映画！

この映画の邦題を見て、私はこれをつきりハリウッド映画だと思っていた。だって、チャーリーというのはアメリカ的、英語的な呼び方だから。ところが、これはフランス映画。したがって、チャーリー役の少年探しが難航する中、やっと撮影開始の1カ月前に探し当てた新星ロメオ・ボツァリス少年は、映画の中ではフランス風にシャルレ（シャルリー）と呼ばれている。

もちろん、両親が息子に注ぐ愛情や、クリスマスプレゼントをめぐる微笑ましい風景は、アメリカでもフランスでも似たようなものだが、ひねった作品が多いフランス映画の中で、この映画は珍しくシンプルなテーマ。もっとも、エンジンなしで空を飛んだり、重いおもりを落しても傷1つつかないという模型の飛行機が織りなす冒険とサスペンス（?）、そして家族再生の物語は、やっぱりフランス的……。?

物語の発端は……？

クリスマスプレゼントとしてチャーリーがパパのピエール（ヴァンサン・ランドン）からもらったのは、白い模型の飛行機。楽しみにしていた自転車でなかったことにチャーリーは不満タラタラだったが、「それは次の誕生日に」と言われ、機嫌を直したチャーリーは来るべき誕生日が楽しみ。ところが、その日が来る前に、軍で働く名パイロットだったパパは事故で突然亡くなってしまったから大変。パパの同僚のグザビエ（ニコラ・ブリアンソン）が運んでくれたピエールの私物が入った段ボール箱を、ママのカトリーヌ（イザベル・カレ）は開けることすらできなかった。

また、チャーリーもパパがいなくなったという現実を受け入れることができないまま……。そんなある日、パパがタンスの上に置いてくれた飛行機をチャーリーが抱きしめながら眠ったところ、あーら不思議、翌朝チャーリーが目を覚ますと飛行機は元通りタンスの上に。ひょっとして、この飛行機は自分で飛んでいったの……？ それだが、この映画の物語の発端……。

チャーリーが屋根の上に……

カトリーヌが仕事に出かけるためお手伝いさんに家事を頼んだある日、お手伝いさんからママに緊急の電話が……。それは「チャーリーが屋根の上に1人で立っている」という危険を伝えるものだった。必死で屋根の上に上り、チャーリーを抱き寄せたカトリーヌだったが、飛行機を抱いたチャーリーがそこで念じていたのは「飛べ！ 飛べ！」ということ。つまり、チャーリーの願いは、この飛行機に乗って天国にいるパパに会いたいということだったのだ。

しかし、そんな行動をとるチャーリーが、ママの目から見ればヤバイことはたしか。したがって、カトリーヌがチャーリーの手から飛行機をとり上げ、これをパパの書斎に閉じ込めてしまったのは、親の務めとして当然だったが……。

子供向け……？ 大人向け……？ それとも両方向け……？

この映画は原作コミックを大幅に修正したものとのことだが、模型飛行機が飛ぶという物語が子供向けファンタジーであることは明らか。しかし、名パイロットのパパからプレゼントされた模型飛行機が飛ぶについて、その飛行に何らかの意思が与えら

れており、それを考えさせるのがこの映画のテーマだとすると、それはもはや大人向けファンタジー……？

いやいや、セドリック・カーン監督が原作を大幅に修正した脚本を書くについて狙ったのは、その両方向け……？ そう思わざるをえないほど、この模型飛行機の飛び方にある意思が感じられるところがミソ。ママの手で書斎に閉じ込められた飛行機は、何と今度は勝手に書斎から逃げ出していったばかりか、怒りを爆発させるかのように再度窓ガラスを割って家の中に侵入し、暴れ回ることに……。こりゃ、一体ナニ……？

カトリーヌの行動は当然だが……

模型の飛行機がなぜか空を飛ぶ姿を自分の目で目撃したカトリーヌは、「何かあったら相談してくれ」と言われていたグザビエに連絡したのは当然。ここでグザビエが偉いと思うのは、カトリーヌからそんなバカげた話を聞かされても、それを言下に否定せず、率直に模型飛行機を調べてみるという対応に出たこと。そして、飛行機を研究所に持ち帰ったグザビエが、これをいろいろな視点から分析してみると……？

さあ、2人の冒険が開始！

飛行機が研究所へ運ばれたことを知ったチャーリーは、隣りに住むクラスメートの女の子メルセデス（アリシア・ジェマイ）と共に早速行動を開始した。まずは、メルセデスの自転車を借りて研究所へ急行することに。ところが、何ゴトにも興味津々のメルセデスは自分も一緒に行くと言い出したため、交代しながら2人乗りでやっと研究所に到着。さあ、ここから開始される2人の冒険が、この映画後半の見モノ。

メルセデスのおとり作戦（？）によってまんまと広大な研究所内に侵入したチャーリーは、分析をくり返しているグザビエたちの部屋に到着し、ちょっとした隙を見計らって飛行機を取り返すことに成功した。かに見えたが……？

後半はサスペンスタッチも……？

この映画中盤のハイライトシーンは、追い詰められたチャーリーが念じる「飛べ！」の声に応じて、模型飛行機が高々と上空に飛び立っていくシーン。ほうきにまたがった魔法使いが空を飛ぶシーンはこれまで何度も観てきたが、少年を乗せた模型

飛行機が上空を飛び回るシーンは、かつて観たことがないもの……？

したがって、模型飛行機のこんな能力を目の当たりにしたグザビエたちが、躍起になってその回収に乗り出したのは当然。したがって、映画後半は、大量の車やヘリまで動員した大規模な模型飛行機の搜索活動が展開されることに。模型飛行機と共にその搜索から逃げ回るチャーリーだが、さてその結末は……？ また、そんなチャーリーを心配するママは、一体どうすればいいの……？



どんな結末が待っているのやら……？

以上ストーリーの概略を含めて、チャーリーと模型飛行機の行動を紹介してきたが、映画終盤はいよいよその位置づけのまとめに入っていくことになる。

ここまでの論点を整理しておけば、その第1は、この模型飛行機は一体どんな意思をもって空を飛んでいるのか、ということ。そして第2は、チャーリーはいつ、どんなことによって、パパが天国に行ってしまったという現実を受け入れることができるのか、ということ。そして第3は、現在模型飛行機の扱いをめぐる対立している(?) グザビエとチャーリー、そしてママとチャーリーとの関係が、いつどんなことによって修復されるのか、ということ。

模型飛行機が何らかの意思をもって空を飛び回るという現象は当然一時的なもので、すべての問題が解決すればその役割を終えるはず……？ そんな風に再度ここで論点を整理したうえで、映画の結末に向けての心温まるストーリー展開を楽しんでもらいたいものだ。

2007(平成19)年 8月25日記